

国際健康福祉実習インドネシア最終レポート

私が国際健康福祉実習インドネシアに参加した理由は、将来子どもたちのために働きたいと考えており、海外の児童養護施設を見に行ける貴重な機会であるからだ。そしてこのプログラムに参加し、普通の大学生活を送るだけでは得られないような様々な経験を積むことが出来た。私はこの2週間ボランティアワーク、日本語授業、日本食作りなどのプログラムを進めながら、施設の子どもたちと関わっていく中で多くのことを学んだ。実習前に考えていた「海外の施設の現状を知る」「プログラム開始前よりも終了時点で何かしらの成長を遂げる」という目標の達成度は80%であると考ええる。

スポーツ大会や縁日では、プログラムを進行するに当たって自分たちの課題も多く浮き彫りとなった。1つめは情報共有の不十分さである。インドネシア学生に伝わっていないだけで無く、日本人学生同士でも情報共有が出来ておらず、全員にミス無く情報を伝え、共有することの難しさを実感した。プログラムごとに担当の係はいるものの、全てをその係に任せてしまうことで生じるミスや、どんなに綿密に進行内容を考えても、突然の雨などによる予想外の対応に追われてしまうことのように進行出来ないことがあった。学生それぞれが得手不得手を把握し、補い合いながらプログラムを遂行していくことが成功に繋がることを学んだ。日本語授業では、かなりの時間をかけて準備して臨んだため、自分たちでも納得のいく授業ができたように思える。また、学生たちも楽しみながら日本語に親しんでくれたのではないかと感じ、日本語の勉強を頑張ろうと思ってくれるきっかけになればいいなと思った。しかし、全3回あった授業の振り返りを怠ってしまったことを先生から指摘していただき気がついた。1回目の授業で成功したと感じたことで、そのまま次の授業に臨んでも大丈夫であろうという思いが芽生えてしまい、振り返りをあまりせずに流してしまった。そのため、授業を重ねていく中での改善はあまりなかったように感じる。自分たちにとっても高校生たちにとっても貴重な時間を少しでもよいものとするために失敗から学ぶだけでなく、成功した時もしっかり振り返り、次に向けて考えることの大切さを実感した。そして、衛生指導。今回歯の磨き方と頭の洗い方、手の洗い方のマテリアルを作って実習に臨んだ。プログラムの進行上、歯の磨き方の指導しか出来ないと思っていたが、時間の合間を見てマンディの時間も少し手伝うことが出来た。歯磨きの指導では、プラークチェッカーを使って指導したが、ほとんどの子はしっかり磨くことが出来ていなかった。それは頭を洗っているのを見ても同様に感じたことである。また、虫歯や頭にシラミがいても気にすることなく普通に生活しているように感じた。小さい頃から親元を離れている子どもたちにとって、洗い方の指導や習慣づけを行うことや小さい子どもたちが自分で全てを完璧に行うことは難しく、大きな課題であると感じた。手の洗い方のマテリアルを水道のところに貼っていると、指導する時間は無かったもののそれを見て一生懸命手を洗ってくれる子どもたちの様子を見ることができて本当に嬉しかった。衛生面

に関しては、いかに継続させるかが課題に挙げられるが、今回のようにマテリアルを見ながら歯を磨いたり、手や頭を洗い続けてくれたら良いなと感じた。

私はこのプログラムで2つの短所に気がついた。1つめは周りを見て行動することである。自分では、周りを見ることは得意な方であると思っていたが、全然できていなかったように感じる。それが顕著に表れたのは子どもたちとプールで遊んでいた時である。他の子に氣をとられているうちに、一人の子が溺れていることにすぐに気がつくことが出来なかった。その日のミーティングで「責任感をもって子どもたちと関わる」ことを指摘してもらい、ただ自分たちは子どもたちと遊びにここに来たのではない以上責任感を持つことの必要性を学んだ。また、プログラムも終盤に近づき、少し時間にゆとりが出来たことで、何人かと感じたことを共有出来る時間が生まれた。その中でもっと早く気づいてあげたら良かったと思ことや、気を配ってあげられたら良かったと感じることが複数あった。言ってくれば良かったのに、相談してくれたら一緒に考えられたのにとか思ったが、その時その場で自ら相談できる人は少ないはずであった。自分自身も人に相談することが苦手であり、聞かれてもあまり何も言わない性格だからこそ、もっと周囲に気を配り、少しの変化に気がつける人になりたいと感じた。2つめは「積極性」である。日本に帰ってきてエバリュエーションのために議論していく中で、疑問点が多くあり、問題を解決しようにも細かいところまで確認が出来ておらず、解決に繋がらないことがあった。もっと率先して聞いておけばよかったと思うことが多く、積極的に質問や行動することの大切さを実感した。

この2週間このプログラムに参加して福祉に直接関係しないところで実感したことが一つある。それは英語や現地の言葉が話せるとより深く交流出来るということである。私のこのプログラムの参加理由に英語の上達は含まれていない。しかし、インドネシア語が喋れない私たちにとって、インドネシア学生とのコミュニケーションの手段は英語しかなく、会話や説明、ミーティングも英語で行っていたが、と元々英語が得意でない自分にとってかなり大変であった。さらに、施設の子供たちと関わる中でインドネシア語が喋れない、分からない点はかなり痛手となった。もっと子どもたちと話してみたかったが、ジェスチャーだけでは限界があり、翻訳機を使って会話するには少し壁を感じてしまうため、インドネシア語が話せたらもっと聞きたいことが聞けたり、仲良くなれたのではないかと感じる場面があった。インドネシア学生たちは聞き取れなかったり、分からないことあると少しでも分かりやすいように言いなおしてくれたり、私の拙い英語から文意をくみ取ってくれてインドネシア語に翻訳してくれたりと多くのことをサポートしてくれた。たった2週間という間でこんなにもインドネシア学生たちと仲良くなれるとは思っていなかったし、実習前よりも英語を話すことに抵抗がなくなり、少し上達出来たように感じる。また、インドネシアについてもたくさんのことを教えてくれてインドネシア学生のおかげでよりインドネシアを好きになることが出来た。この16人のメンバーでプログラムを遂行出来て本当に良かったと感じる。

これらの経験から私は多くのことを学び、特に施設の子どもたちは様々なことを考えるきっかけを与えてくれた。異なる背景を持ちながら親元を離れて施設で暮らし、思い出したくもないような壮絶な過去を持っている子どもたちもいる中で、それでも私たちを迎え入れて一緒に遊んでくれた子どもたちに自分は何が出来るのか。2週間考えながら実習に取り組んでいたが、自分の中で結論を出すことができないまま実習が終わってしまった。今の自分は経験も少なければ、知識も少ないため、子どもたちを支援したいと思っても限界がある。今回出会えた子どもたちは施設を離れて自立してしまっているかもしれないが、何年、何十年かかってもその施設の子どもたちや同じような境遇で生活している子どもたちのために働くことが私の新たな目標となった。そのために、大学生のうちに多くの経験を積み、自ら行動していきたいと考える。一生忘れない、忘れたくない経験ができ、将来について考え直すきっかけになったこのプログラムは、多くの人たちの支えと協力があったおかげで無事に終えることが出来た。その感謝も忘れずに、この経験を次ぎに生かしていきたいと思う。